2023 年 5 月 29 日放送

「第 74 回　日本皮膚科学会　西部支部学術大会　①

大会を終えて」

久留米大学　皮膚科
教授　名嘉眞　武國

はじめに

この度、第 74 回日本皮膚科学会西部支部学術大会を、2022 年 10 月 22 日、23 日の 2 日間にわたり開催させていただきました。当教室での開催は橋本　隆名誉教授が 2004 年に開催後 18 年ぶりの開催となりました。ただ数年にわたり COVID-19 には振り回され、学会の開催時期がどのような制限になっているのか全く予想できず、さらには本学会の前年度が宮崎、そして次年度の開催が沖縄という日本でも屈指の観光地の開催の間であり、参加数が少ないのではないかと大変危惧しておりました。ところがいざ開催したところ、参加数は予想を大きく上回ったことには大変驚くとともに安心できました。これには学会開催に関わった多くの皆様のおかげであることはもちろんですが、たまたま COVID-19 の制限が緩んだ時期であったこと、5 年ほど前に建築された会場の久留米シティ―プラザが大変広くきれいな建物であり、街の中心にあることから交通の利便性も良かったことが挙げられると思います。また開催期間はとても天気がよく、後ほど述べますが多くの学会などで開催されることがなかった会長招宴会や懇親会の代わりに、タイミングよく昼間にランチョンハッピータイムを開催できたことも理由の一つと思いました。それでは学会の概要について簡潔にお話しさせていただきます。

特別講演

まず特別講演ですが、5名の先生方に依頼しました。お一人目は元世界医師会会長・日本医師会会長をお務めになり当大学外科学講座の同窓生でもあります横倉義武先生です。先生はそのお立場から3年間のCOVID-19のパンデミックの状況に対して、先頭にさらに中心となって奮闘されたお話から今後の対策および新興感染症に対する備え方について我々医療従事者にとって大変有意義な内容を伝えていただきました。お二人目は当大学の学長で神経精神医学講座の名誉教授で睡眠学会の理事長でもある内村直尚先生です。先生からは我々皮膚科医に役立つ抗ヒスタミン薬の話から、適切な睡眠薬の選択と使用法および不眠症が想定以上に多い医師にとって良質の睡眠が仕事だけでなく日々の生活においていかに大事であるかについてお話ししていただきました。三人目は東邦大学医学部微生物学・感染症学講座の教授で元感染症学会の理事長であります館田一博先生に、数年にわたり世界を騒がせたCOVID-19について、これまで、そして今後の動向について専門的視点からお話ししていただきました。今でこそ感染症法で第5類となったわけですが、今後もまだまだ油断してはいけないことには変わりはないようです。四人目は東邦大学医療センター皮膚科の名誉教授で、ご存じの先生方も多いと思いますが皮膚病診療の編集委員長であります向井秀樹先生にご依頼しました。先生は皮膚病診療にほぼ定期的に皮膚科関連の医療事故についての記事を記載されており、それに関連するお話を依頼しました。ここでは若い先生方だけでなくベテランの先生方も緊張するお話が聞けて、今後の診療に改めて真摯な診療に心がけていくことの重要性を学べたと思います。最後の5人目ですが、久留米大学バイオ統計センターの教授であります室谷健太先生に依頼しました。私がそうですがベテランの先生方でも統計解析に苦手意識を持っている方は多いと思います。統計に関わる論文も作成・投稿する機会が近年増えていることもあり、質疑応答も活発で企画して良かったと感じました。

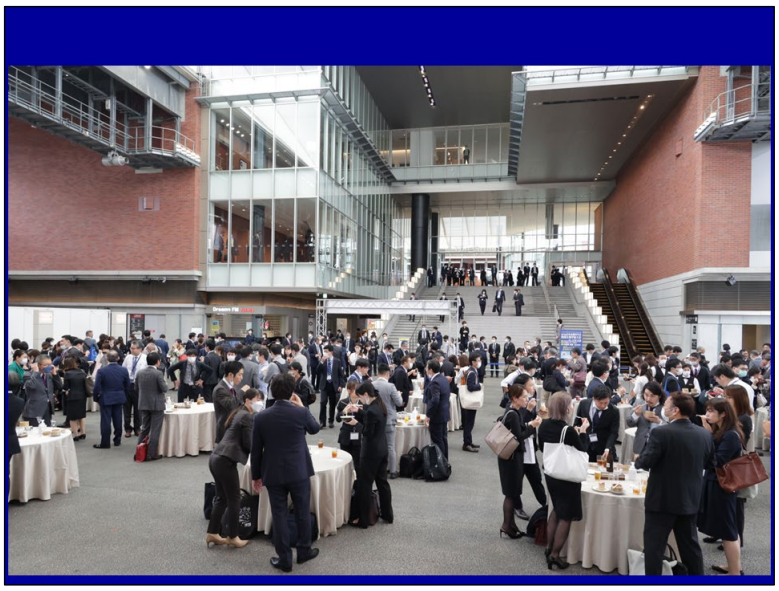
シンポジウム

次にシンポジウムです。これこそ本学会のテーマである「他科とのコラボから皮膚科学の魅力を」に即したものとしました。ここ数年皮膚科学領域では炎症性疾患を中心に多くの新規治療薬が承認されてきています。これは各疾患の新しい病態の解明に伴うもので、しかも疾患によっては他科との先生方とも基礎的および臨床的観点からお互いに協力して学び、全身疾患的な視点から多くの患者に治療を提供する時代となってきています。学会では「自己炎症症候群」「遺伝性血管性浮腫」「掌蹠膿疱症」「乾癬群」を掲げ、演者には

他科、皮膚科ともに各領域のご高名な先生方にお話ししていただきました。どの会場も活発な討論が交わされ、多くの先生方から大変勉強になったとお聞きし、充実した企画であったと感じ、私だけでなく拝聴していただいた先生方にも今後の診療に大変役立つ内容が学べたと確信できました。また教育講演 1 では「表皮水疱症」のテーマで石河　晃先生（東邦大）と玉井克人先生（大阪大再生誘導医学）のお二人に、最新の大変興味深い再生医療のお話をしていただきました。そして当大学の目玉である「自己免疫性水疱症」は教育講演 2 として古賀浩嗣先生（久留米大）と廣保　翔先生（大阪公立大）のお二人に最新の知見についてお話をしていただきました。さらには近年、悪性黒色腫を初め皮膚悪性腫瘍の治療として免疫チェックポイントを中心とした薬剤による数種の薬剤が開発されその有効性が話題となっている反面、やはりいまだ副作用も含めた課題が多いことも事実ではあります。そのような状況の中で 3 大皮膚悪性腫瘍である「悪性黒色腫」「血管肉腫」「メルケル細胞癌」に絞って改めて外科的治療の位置付けについて、順に山崎　修先生（島根大）、藤澤康弘先生（愛媛大）、松下茂人先生（鹿児島医療センター）にご講演していただきました。結論から申しますと、全身転移があるような症例でない限りやはり外科的治療は欠かせないことは事実ですが、次第に適切な切除範囲が十分に検討されるようになり、予後がどのように左右されようと QOL の面には価値あるものとなってきているものと理解できました。そしてその外科的治療が、その後のスムーズな化学療法に繋げていくのに重要な位置付けともなっていることも再認識できました。

<u>ハッピーランチタイム</u>

　最後にお昼に開催したハッピーランチタイムについてお話しします。ここ数年 COVID-19 の影響により多くの学会を含め会長招宴会や懇親会を催すことができず、「おもてなし」に関しては開催側や参加者にとっても不完全燃焼の気分であったのではと思っておりました。そこで久留米でせめて現地に参加した先生方だけでも喜ばせる企画ができないかと開催の 2 年前から熟考しておりました。久留米は観光地ではありませんが、国内屈指の B 級グルメの町です。それを活かしてランチョンセミナーの時間を短縮しお弁当も質素なものにしていただき、思い切って昼間に 1 時間以上の時間を使って屋台として「焼き鳥」「らーめん」「うどん」「寿司」「鰻のせいろ」「サンドイッチ」「デザート」のお店を設けました。そして一部反対されましたが私のわがままで「ビール」「冷酒」も設けました。さらには学会開催数日前に女性



の先生からそのイベントに子供を参加させたいと連絡がありましたので、久留米のイメージキャラクターの「くるっぱ」の着ぐるみも準備することにしました。幸いちょうどその時期はCOVID-19感染が全国的に激減していて制限が緩和されており、会場も広く吹き抜けとなっており感染のリスクも低く天気も快晴があったことから最高の好条件となりました。おかげさまで昼間にも拘わらず多くの先生方に参加いただき大変盛大であったことを感じたのは私だけではなかったはずです。あちこちで「久しぶり！」「楽しい！」と喜びのお声を聞くことができ、想定以上の盛り上がりに本学会に現地で参加したのはこのイベントに参加することがメインの目的ではなかったのではないかと思えるほどでした。

終わってみれば総参加数1,079名、現地参加数626名と予想していた数を大きく超える先生方に参加していただき、大盛会で終えることができたと自画自賛してしまいました。これもやはり山田紀子様を中心とした日本皮膚科学会の学会運営事務局の皆様、また久留米シティープラザに関わる方達、久留米コンベンションプラザの方達、そして同窓会および同門会の先生方のおかげです。そして最も感謝するのはお忙しい中事務局長を務めていただいた久留米大学准教授の石井文人先生です。本当にありがとうございました。

「マルホ皮膚科セミナー」
https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/